れとらと

白日朝日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
れとらと

【Ｎコード】
Ｎ９７０９Ｗ

【作者名】
白日朝日

【あらすじ】
主人公はどこか不安定な男子高校生。そんな彼は幼なじみの後輩によって現実に繋ぎ止められながらなんとか生きている。しかし、彼の前に今の彼を形成するきっかけとなった、死んだはずの双子の妹が現れる。
「お兄ちゃん、ころしにきたよ」
大きな鎌を胸に抱いた、死神の姿で。

れとらとぼくと

”ｒｅｔｒａ　ａｎｄ”

「ねえ、お兄ちゃん」

れとらが僕の名を呼んだ。

振り向いてもそこにれとらの姿はなく、ただ海の青と空の青だけがその境目をとかすように消失点の向こうで一緒になるのが見えるだけ。僕はれとらの小さないたずらに呆れながら息を吸う。

それから一瞬、僕の視界は暗転した。

「だーれだ。お兄ちゃん」とついさっき僕を呼んだばかりの声が届く。

「めんどうくさいから答えなくていいかな？」

僕の目をつつむふたつの手は思った以上にあたたかくて、まるで眼窩の奥にも彼女の血が流れていくような感覚を覚えてしまう。真っ暗な世界は潮の香りと波の音、それかられとらの声と手の感触だけで満たされていて、まるで僕の世界が侵食されているみたいだった。

「もののついでだからいいけど」

そうしてれとらは僕を目隠ししたままで首の向きを変えようとする。

「いたっ、いたた。人間の顔は二百七十度も回らないよ！」

「おかねもちになりたければ、がまんを」

首が一回転くらいするパフォーマンスができたならそりゃお金持ちにもなれそうですが。

「逆側に九十度曲げれば済むと、僕は思うのです」

「うむ。お兄ちゃんはかしこいね」

そう言って、既に身体を反転していた僕の首をもう一度逆方向に二百七十度回転させようとするれとらのひかえめな腕力に逆らいな

がら、目隠しを解いた。
目の前には先ほどとこれといって変化のない一面の青と、僕から額ひとつぶん低いところにある側頭部の長い髪を赤いリボンで束ねたれとらの姿があった。
「はんぶんこ」
そう告げたれとらの指さす向こうには、海のなかへと続いていく一本のいびつな直線が掘られている。
「これ、なに？」
「お兄ちゃんとわたしでせかいをはんぶんこにした、そのしょうめい」
まるで話が読めません。
「もっと分かりやすくお願いしたいんですが」
首をかしげるれとらの頭上に手を置いてパードゥンを試行する。ちょうど僕の手のひらに彼女のリボンがふれてすこしこそばゆい。
「これはね、きょうかいせんなの。ここからがお兄ちゃんの、ここからがわたしのせかい」
「ふたりだけの世界ってこと？」
「ううん。たぶんね、ふたりでひとつのせかいがほしかったの」
れとらはほとんど感覚だけで言葉をつむいでいるように見える。
「でも、この波だと線なんてすぐに消えちゃうな」
言うが早いか、ざざ、と僕らの足元近くに寄せてきた白波はれとらの掘った世界の境界線を薄くとかしてゆく。
「そだね」
さして残念でもなさそうにれとらは目を細めて笑う。
消しゴムを往復させるように波は次に次にとやって来ていつの間に砂浜はなにもなかったように元通り、茶色と薄茶色のオーロラに戻っていた。
「ねえ、れとら」
「なに、お兄ちゃん」
「その境界線にはしっこはあるのかな」

潮風に髪を遊ばるれとらに、僕は波の音の合間を縫って問いかける。
「どうだろうね」苦笑い。潔すぎる青色をバックに揺れるリボンの赤と髪の黒。
「設定が甘いね」
「乙女はそんなものです。設定よりも関係性をあじわうものです」
「また適当なことを」
今のうちに乙女の人たちにあやまっておいた方がいいんじゃないかと思うところだけど、れとらの遠くを見つめる顔を見ているうちにどうでもよくなってしまった。
「ねえ、お兄ちゃん」
「なに」
「大好き」
「また適当なことを言う」
「てきとうじゃないよ」
聞こえさせるか迷ったような声量でれとらはつぶやく。風にあずけた彼女の声はかすかにだけれど僕の耳に届いて、なんとなく反応がとりづらいままで、海と空の消失点の向こう側を望んでいた。
それは、いくつのときのことだったかもおぼろげな夏の記憶。
だというのに僕は世界を分かつ境界線のはしっこを未だどこかさがしている。
境界線の切れ目なられとらと繋がっているはずと信じながら。

1st chapter ”retra”

アスファルトに雨の滴がおちて黒い水たまりにうつった世界は波紋とともに揺らぐ。
傘の先でいくらつついても水たまりの先にある世界へはとどかず

に、僕はメルヘンめいた感傷だけを置き去りにしてビニール傘をひらき、僕の家の門から歩いて十二歩、咲希の家へとお迎えにあがる。咲希は待っていたのだろうか既に家の扉の前に立っていた。まっすぐに肩の下までおりた長い黒髪の隙間からうかがう彼女の表情はどこか所在なさげにも見える。

僕が咲希に近づいて手をあげると、その顔から揺らぎのような色合いが消えた。アイロンをかけたようにピシャリとした態度をつくる咲希。彼女のいつもの装い。

「カナ先輩おはようございます」やけに早口で咲希は僕にあいさつをする。

「うん。おはよ」

「はやく行きますよ」

咲希は澄ましたような表情でさっさと門扉を抜けて僕の前へと進み出す。それはいつもと変わらぬ挙動で、たぶん彼女なりに僕を意識せずに済む距離のとり方なのだと思うけれど、そこまで気遣うなら僕との登校をやめればいいのにとも考えてしまう。

咲希とはもう何千日もこんな風に登校している。僕が彼女より先に進学する年をのぞけばほぼ毎日、横にいない方が違和感を覚えるくらいにはいっしょにいる。

「ねえ、咲希と僕の関係って知らない人が見たらどう思うかな……」

「知らない人は、わたしたちのことなんか気にしないですから」

一瞬だけ呼吸の間をあけ咲希が答える。傘を打つ雨音は強調されたみたいに耳に届く。

「違いないな」

僕は彼女の解答に不思議と満足してしまった自分に気づく。見上げた頭上には傘の布地、太陽はまだいくつかのものに遮られている。

「カナ先輩」

僕の前を歩く咲希は立ち止まり、振り向かずに言う。

「忘れられないですか」

目的語が「なに」かをわかっていながら僕は聞かないふりをした。

雨のしずくのカーテンは傘をにぎる僕の手を冷たくしてゆくけれど、こういう時だけはすこしだけ優しい。咲希はなにもなかったようにふたたび歩きだし、僕は彼女と付かず離れずの距離をついてゆく。
「ねえ、カナ先輩」
隣を歩きはしないくせにこうしていつも話しかけてくる。
「なにかね、花野芽嬢（はなのめ）」
「なんかその呼び方、ヤですね……」
僕もカナ先輩と呼ばれるのは結構不本意なんですけど。
「知ってます？　流星群がそろそろ近づいてくるらしいのですよ」
どうにも上手くない咲希の丁寧語もそれはそれでかわいいとは思うけれど、彼女はそれをやめようとしない。
「しぶんぎ座流星群だね」
「そうそう、それです。私文書偽造流星群」
「そんな刑法に引っかかる流れ星、願いをかける気すら失うよ」
「なんとなく楽しみだなあって」
言い終えると咲希は空を見上げてみるけれど、星空は雨雲の向こうで日差しにも隠されて見えることは決してない。
「咲希は女の子なんだし、せめてその前にあるクリスマスとかを楽しみにしようよ」
「楽しみにするには、あと二日で恋人をつくらなきゃいけないですから」
今日は十二月二十二日、クリスマス・イブから逆算すればあと二日でついでに言えば僕らの通う学校の終業式の日にあたる。
「咲希ならやれる」
「適当なこと言わないでください……」
声色だけでげんなりしているのが伝わってきて僕は彼女にバレないようくすりと笑う。
そんな会話を続けているうちに少しずつ通学路を歩く人間は増えてゆき、学校前の大通りもすぐ近く、同じ色彩がひとつの道を流れる様はまるで血液みたいだと僕は感じた。個性はと言えば傘の色く

らいだろうか。別に人嫌いというわけではないけれど、人混みというのはどうにも人間のことを個別に感じられなくて好きになれない。
「ナノメー！　ナノメー！」
平凡を表す日本語っぽくも長さを表す極小単位っぽくもある言葉が僕らの前方から届き、咲希はほんの半歩程度ながら僕との距離をあける。
「リノさあ、変なあだ名やめてって言ってるでしょもー」
その声にリアクションを返す咲希。声の主は咲希の友人で確か、茉莉乃ちゃんだったか。
「かわいいからよし。ていうか、オハヨ」
「おはよ」
なんとなく入りこみづらい空気が構成されつつある。ひとつ歳下程度だけど女の子同士の会話というのは、自分との間に妙な距離感を覚えてしまう。
「あと、お兄ちゃん先輩さんおはようございます」
「うん。おはよう、茉莉乃ちゃん」
そんなことを考えていたところだけど、挨拶を交わしたおかげで場に入り込めた。意味のよくわからない呼称については一旦保留にしておいて良いだろう。
「あたしの名前覚えててくれたんですねー。へっへっへ、今後ともうちのナノメをしっぽりよろしくお願いします」
その願いにどう応えれば良いのかわからないものの、
「どもども。こちらこそ、咲希をよろしく」
という感じに、おおよそ高校生の交わすような会話か疑わしい言葉の応酬をした。
「いや……カナ先輩はそういうわけじゃないですから」
咲希は少しばかり照れた調子で茉莉乃ちゃんに反論をする。……なぜか丁寧語で。
「やー、だって毎日いっしょに登校したあげく、その相手を『お兄ちゃん』て呼んでたら、怪しみもするのだわ」

そう。咲希は普段僕のことをお兄ちゃんと呼んでいて、登校時みたいに人の目がある場所では呼称をよそ行きに変化させているのだけど、茉莉乃ちゃんには咲希が「お兄ちゃん」と呼ぶところを見られてしまっている。それ以来ではあるけれど、咲希の僕に対する人前での態度は冷たい雰囲気に修正された。

「まあ、どちらにしても咲希は幼なじみだよ」

「……です」

「うー。まあ、あたしの名前を覚えてくれたお兄ちゃん先輩に免じて、いいとしましょう」

その言葉に胸をなでおろす。茉莉乃ちゃんが僕と咲希の関係を勘ぐる理由を知らないわけじゃないけれど、この辺の話はあまり人前でしたいものでもないし、できることなら咲希と僕の間程度にとどめておきたい秘め事というやつだ。

「じゃあお兄ちゃん。わたしリノと先に行きますから」

咲希はそう言うと茉莉乃ちゃんの手をにぎって僕から離れていく。茉莉乃ちゃんは咲希に見とがめられないよう僕に小さく手を振って、僕もまわりに見られない程度に手をあげた。

「ナノメ。いま、お兄ちゃんつった」

「言ってないですー」

ちなみに咲希はウソや誤魔化しが下手なのだけど、本人はそれに気づいていないらしい。遠ざかるふたりの声は通学路の雑踏に溶け合って、僕は雨の拍子を聴きながらひとりの道を歩いていく。

友達と連れだって楽しそうに歩く男子生徒もいれば、ちょうどいまの僕みたいにひとりで少し寒そうに肩をすくめて歩く女子もいる。足元の水溜まりから跳ねる水はズボンのすそを汚すけれど、明日から休みということもあってだろうか、この雨に憂鬱な顔を見せる生徒は少ない。

「……と、悪いクセかな」

ひとりごち自戒する。どうもひとりでいると周囲のことばかり見ようとしてしまうらしく咲希にはそのことをよく注意されている。

良い面でもありますけど、とは言っていたものの人混みでたびたび注意散漫になっているとどうにも心配されるものなのだろう。
でも、
「忘れられるわけないじゃないか」
僕が彼女を忘れることは、おそらく一生かけてもありえない。
だから、捜してしまう。
僕の半身だったひとりの少女をただ無意識に捜してしまう。
信号待ちの、登校中の、電車の中の、通勤ラッシュの、大通りを歩く、裏道を歩く、人の背中が流れる中に「小鳥遊れとら」を捜してしまう。
そう、だから、
「ねえ、カナちゃん」
この時は幻覚だと思ったんだ。
馴染みない呼称とよく知った色調の僕を呼ぶちいさな声に思わず顔を向けた人混みの中、
「かえってきたよ」
人が通り抜けてゆくその空間に、通学路を歩くたくさんの背中と同じような制服を着た、大きな鎌を持つ人物が立っていたことを。
まるで現実感を失ったそれが僕の手から消えていくのが怖くて僕は彼女に応えなかった。彼女の言葉は今にも雨の雫ひとつに溶けゆきそうなほど心細くて、ふれたら壊れそうなほど薄いプリズムの膜みたいで。
「ころしにきたよ。お兄ちゃん」
僕は彼女の言葉一切を耳に留めながら、彼女の髪の毛ひとつ、文字通り寸毫違わない姿を記憶におさめるようにしながら、彼女に一切応えず歩いた。
今なら間に合う。自分のつくった幻想に引き込まれずに済む。そうすれば、いつも通りに日々を送ることができるんだ。
――でも、なんのために？

いつも通りを続けるために。
――それは、なんのために？
「……」
言葉にならないなにかが雨粒の跳ねる音に消える。僕は振り向かないまま彼女を通りすぎ登校中のたくさんの背中、そのひとつになって薄れて溶けた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9709w/

れとらと

2011年9月24日03時30分発行